



人と地域に向き合った

学生時代の経験が原点。

KSB高松本社にて

ONAIR

INTERVIEW.

好きを行動に変えた、
学生時代の挑戦

学生時代の中心にあるのは、学生チャレンジプロジェクトの活動です。地域の中小企業と向き合う「なえどこ」と、讃岐提灯を観光資源として再定義する「TERASU（テラス）」。どちらも、やりたいことや会いたい人に自らアプローチし、企業や団体など大人を巻き込みながら取り組みました。当時は好きなことをやっているという感覚でしたが、今振り返れば、実に贅沢な時間だったと思います。そしてこの2つの経験が交わることに、現在の仕事があります。大学時代の活動は今も、自分の価値観の土台であり続けています。

地域課題に向き合い、
現場から学んだ学生時代

「なえどこ」では、商工会議所と協働して県内中小企業の訪問ツアーや講演会を企画。経営者や社員の方々から働くことへの思いを直接聞く機会を重ねました。仕事内容だけでなく、会社の雰囲気や働く人の個性が見えてくるこの経験は、自分自身の就活の軸を形成してくれました。

地域の魅力を
掘り起こし、次の世代へ
つないでいく

現在はKSBマーケティング・セールスで営業クリエイティブ職として働いています。クライアントの課題を丁寧にヒアリングし、採用・ブランディングなど目的に応じてテレビ・ラジオ・イベント企画・動画制作・SNS運用などさまざまな形で提案します。クライアントの課題解決のなかで自分の強みを発揮できたとき、大きなやりがいを感じます。

特に印象に残っているのが、高松市の広報番組「たかまつ風土記」の企画・制作です。在学時、西成ゼミで学んだフィールドワークの視点を活かし、高松の「海・城・町」が近接する独特の地形と歴史文化をテーマに据えました。西成先生にも解説者として出演いただき、学術的な知見と映像制作を結びつける番組を、尊敬する先輩たちとチームで完成させ、3回にわたって放送しました。視聴率だけでなく、YouTubeの再生数も伸び、SNSでは「宇高連絡船」関連の投稿が増えました。地域の人たちが自分の言葉で、地元の歴史を語り始める、そんな小さなムーブ

また、小豆島の空き家活用プロジェクトでは、人口動態の分析やフィールドワークを通じて地域課題を深く掘り下げ、「迷路のまち」という小豆島独特の景観を活かした民泊事業を大学生主体で立案・運営。この取組は高く評価され、内閣府主催の地方創生担当大臣賞を受賞しました。

「TERASU」は、讃岐提灯という伝統工芸品の魅力を、現代の人々に届け直すことを目指しました。なかでも力を入れたのが、屋島山上で実施した「ちようらんカフェ」です。屋島は瀬戸大橋開通時をピークに、観光客が減少傾向にありました。そこで新たな魅力を生み出したいという思いから、提灯のやわらかな光と屋島の夕夜景のコラボを楽しみながら飲食ができる会場づくりを企画。代表としてイベントの企画・運営から広報まで幅広く携わるなかで、伝統工芸を「難しいもの」ではなく「身近で楽しいもの」として感じてもらうことの大切さを学びました。地域の子どもたちに向けた提灯づくりワークショップを各地で開催したのも、同じ思いからです。

私にとって、「なえどこ」は人との出会いを通じて、自分の価値観や将来像を育てる場であり、「TERASU」は地域への愛着や情熱を形にする場でした。この2つの活動を通じて築いた人脈や経験は、今でも大きな財産になっています。

メントが生まれたことは、地元への恩返しができたようで嬉しかったですね。これからも香川の魅力や人の思いを伝える仕事を続けながら、学生時代に多くの人に支えてもらった分を、次の世代へ少しずつ返していきたいと思っています。



株式会社KSB マーケティング・セールス
高松本社営業ユニット

た だ あ さ と
多田 安里

香川県出身。2020年香川大学経済学部卒業。
営業クリエイティブ職として企業のマーケティング支援やCM・テレビ番組のプロデューサー、イベント企画や運営を担当。
座右の銘は「一日一善」。その思いは仕事にとどまらず、ボランティア活動を行うなど、日常の中に息づいている。

学生時代の思い出①



テーマ「小豆島 × 迷路民泊 × 空き家～空き家が島の宝に!?迷路民泊を起点とした観光振興で小豆島がもっと元気に!!～」の取組が内閣府主催の地方創生担当大臣賞を受賞!（前列右から2番目）

学生時代の思い出②



北浜アリーのカフェで開催した讃岐提灯の展示とワークショップの様子。カフェでのイベント開催は初めてで、新たな提灯の活用方法を見出し、活動の幅を広げることができました。（中央）